

子どもの本

研究会

【私の一冊】 『子どもの宇宙』 河合隼雄 著（岩波新書 一九八七年）

小山 一行



本書は、ユング派の臨床心理学者であり、心理療法の実践者でもある著者が、古今東西の著名な児童文学作品や臨床現場からの報告等を題材にしながら、子どもの内面の奥深くに潜む「宇宙」について述べたものである。河合はその執筆の動機について、冒頭に次のように言う。

この宇宙のなかに子どもがいる。これは誰でも知っている。しかし、ひとりひとりの子どものなかに宇宙があることを、誰でも知っているだろうか。それは無限の広がりと深さをもって存在している。（中略）大人たちは小さい子どもを早く大きくしようと焦るあまり、子どもたちのなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、回復困難なほどに破壊したりする。このような恐ろしいことは、しばしば大人たちの自称する「教育」や「指導」や「善意」という名のもとになされるので、余計にたまらない感じを与える。

このような観点から、著者は「子どもと家族」、「子どもと秘密」、「子どもと動物」、「子どもと時空」、「子どもと老人」、「子どもと死」、「子どもと異性」という七つのテーマに沿って論を展開する。ここでその詳細を要約することは不可能であるが、筆者が最も心惹かれたのは「子どもと時空」および「子どもと死」の二章である。著者は、「子どもたちはこの世の時空を超えた世界の存在について非常によく知っている。（中略）子どもたちの時空を超えた世界の体験は、われわれ大人にとっても教えられるところの大きいものである」と述べ、このテーマを考える題材として『ふしぎの国のアリス』やエンデの『モモ』、そして石井桃子の『ノンちゃん雲に乗る』等を取り上げる。そして、第六章では、何と「子どもと死」の問題を取り上げ、「子どもは思いのほか死について考えている。しかし、そのことを大人に語ることは少ない。言ってみても、大人が不愉快な顔をするだけだったり、大して意味のあることを言ってくれないことを、彼らはよく知っているであろう」と記している。

巻末には、本書で言及した作品や症例の報告が注記として示されており、子どもの心を理解するための参考文献リストとなっているのも有り難い。



（武蔵野大学教授）